

住

愛知県建築組合連合会

社会システムの変化で 大工仕事自体も変化

組合の原点は室町時代から続く太子講

聖徳太子といえば香炉を手にした姿が一般的ですが、^{さしがね}指矩を手にした像があります。指矩は別名を^{かねじやく}曲尺ともいうように、L字型をした物差しで大工道具の一つです。この指矩を日本に広めたのが聖徳太子だといわれています。

聖徳太子は法隆寺の建立に尽力し、先進的な建築の知識を教えたとされ、室町時代ころから大工の神様として祀られ、太子講が行われるようになりました。太子講は職人間の仕事の取り決めや建築の技術に関する情報交換を行う重要な場として、太子の命日とされる毎月22日に開かれてきました。

戦前から続いてきた太子講を元に、昭和23年(1948)に愛知県大工労働組合連合会が発足し、税制や各種保険制度の充実を中心に活動してきました。この時、組合に参加したのは1,380名でした。太子講は現在も続いており、毎月22日にお参りをするほか、春分の日と秋分の日には大祭を行います。

被災地の復興に組合員を派遣

昭和30年(1955)には日雇健康保険組合を設置、その後も組合の名称を変えながら、労災保険、国民健康保険など一人親方が安心して事業に取り組むことができるように努めてきました。組合員は一人親方の大工を中心に、愛知県内の建築業を営む職種で2021年現在、約2,000名の職人が加入しています。

かつて、大工は棟梁とも呼ばれ、建築工事全体の指揮監督を行うこともありましたが、分業化によって建築工事の一分野を担うだけになりつつあります。現場でのカンナ掛けや、寸法どりをしたてで鋸で切断するといった光景も見られなくなり、昔ながらの伝統的技法も伝えるにくくなっています。しかし、そ



尾張名古屋の職人展での実演

の反面、重労働から解放されたこともあり、女性が大工を目指しやすい環境が整ってきました。

組合の仕事は、一人親方が安心して仕事ができる環境づくりはもちろん、国の補助事業である「大工技能者の担い手確保育成事業」やこれまで培われてきた技能を未来につなげていくなど多岐にわたります。

東日本大震災、熊本地震と豪雨災害、長野豪雨災害など復興事業の仮設住宅づくりに組合員を派遣するなど、社会貢献活動にも取り組んでいます。



大工を目指す女性が増えている